

Title	大阪大学看護学雑誌 14巻1号 新任特集
Author(s)	平山, 三千代; 清水, 安子; 梅下, 浩司 他
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2008, 14(1), p. 37-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56693
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

- 新任特集 -

就任のご挨拶



看護部長就任にあたりご挨拶申し上げます。

副部長として着任した今年の春、看護部長は、「今年の新緑は、もうひとつね。」と看護管理室から外を眺めてそうつぶやかれた。窓の向こうには、墨絵のように霞んだ美しい若草色の木々が映っていた。そのとき、私は一昨年までの新緑の景色と一緒に見たかった想いと、来年は、この景色を部長と見ることのできないことに、言い表せない寂しさを覚えた。昔、看護学実習の折、旧病院の病棟処置室の窓越しに堂島川を見ながら、「私は、阪大病院で働きたい。」と心で思っていた。川の流れの傍にそびえ立つ巨大な病院は、私の原風景だった。あれから30年以上が経ち、叶うとは思っていなかった阪大病院に今身を置かせていただいている。学生時代、雲の上の存在であった太丸操看護部長の立場に私がいる。身が引き締まる思いだ。信じがたい事実、日々大胆不敵な自分の行動を後悔しつつ、戻れない日々から自分を解放し、新しい日々へと創りかえる自分でありたいと思っている。

私が嫁して最初に構えた住まいは、奈良県橿原市にある。この地は、万葉集にでてくる「軽の社（かるのやしる）」ではないかといわれており、一千年以上前から人々が暮らし続けていた歴史ある地である。二階の窓からは、香具山、耳成山とともに大和三山のひとつとされる畝傍山を見ることができた。その麓には、近鉄南大阪線があり、赤い近鉄電車が阿倍野方面に走り過ぎるのをみて、「あれに乗れば姫路（郷里）に帰れるのに」と思ったものである。万葉集に“香具山は畝火雄々しと耳成と相争ひき神代よりかくにあるらし古もしかにあれこそうつせみも妻を争ふらしき”と、香具山は畝傍山が素敵だと耳成山と争ったと歌われたように、そのこんもりと立つやさしい姿は、私を育ててくれた大きな存在である。いつも畝傍山を見ながら看護を考えていた。阪大吹田キャンパスは今まさに秋色に染まり冬に向かう人々をあたたかく包んでくれている。きっと、畝傍山を包む甘樫の丘一帯もそうなのだろう。そして、次に移り住んだ茅渟（ちぬ）の海（大阪市の南辺から岸和田市のあたりにかけての大阪湾の海）が見える丘に立つ住まいからは、遠く行き交う漁船をあきることなく眺めることができた。“妹がため貝を拾うと茅渟の海に濡れし袖は干せど乾かず”と万葉集に歌われた茅渟の海、そこは私を未来へと続く夢へいつも誘ってくれた。

親しい仲間や心の拠所としての場所を離れ、今自然豊かな新しい仲間のいる摂津の地に移り住んだ。歴史ある伝統を守り人間性豊かな優れた看護専門職員の育成、一人ひとりの看護職員の自律と協働をもとに、患者さまとともに歩む質の高い看護実践に取り組むことが私の役割である看護を管理するというこの仕事の重みと責任に萎縮することなく、ケアされる人もする人も含め幸せを求めて生きる人々に対してその役割を遂行したいと思っている。

最後に看護職員、病院・大学関係者の方々のご指導、ご鞭撻を切にお願い申し上げます。

大阪大学医学部附属病院
看護部長 平山 三千代



就任のご挨拶

私の専門は慢性病看護であり、主に慢性病をもつ人々のセルフケアの支援に関する研究に取り組んできました。そして、保健学科へ着任する前の半年間、慢性病患者の看護に関する多くの質的研究を行なっているカナダのバーバラ・バターソン先生のところでポストドクトラルリサーチフェローとして過ごしました。そこでの経験を紹介しながら今後の抱負を述べさせていただきたいと思います。

<Chronic Illness Laboratory in school of nursing, University of New Brunswick での経験>

1) 学際的な研究チーム

バターソン先生は、様々な外部資金を獲得しながら慢性疾患に関する質的研究を行っていました。中には、医師、心理学者、社会学者など様々な専門職種と研究チームを組んで取り組んでいるものも多くありました。私の今までの研究の多くは看護の専門家のみでの研究チームでした。そして、必要があれば、他の専門家の人に意見を求めるというスタイルで研究を進めてきました。

ある時、バターソン先生が研究チームの会議が終って部屋に戻ってこられたとき、なかなか主張が理解してもらえず会議が長引いたとすこし疲れた様子で話されたことがありました。しかし、先生は「学際的なチームで研究を行うときにはこれはよくあること。疲れることもあるけれど、こういう機会を通して看護や質的研究の意義を理解してもらうことが大切。また、こうした議論を通じて新たなアイデアが浮かぶこともある」と話してくれました。

私は、以前、糖尿病看護を実践している看護師さんから「食事療法は栄養師さん、運動療法は運動療法士さんにしてもらえばいい。看護師さんって何するの?」と医師に言われたと聞いたことがあります。様々な職種の方がその専門性を発揮する中、患者にとってよりよい医療をチームとして提供できるためには看護としての役割やその意義を明確にし、それを他の医療職者や社会一般の人々に理解してもらうことが必要です。その意味において私はバターソン先生がおっしゃった言葉を重く受け止めなければならないと思いました。そして、大阪大学という学際的な環境に身をおくことが出来たことを機に、今後、様々な専門分野の先生方と研究チームを組み、刺激しあいながら研究が進められればと期待しています。

2) 質的研究に基づいた政策提言

バターソン先生は政策提言につなげることを目指した質的研究もいくつか行なっていました。例えば、糖尿病をもつメキシコに住むアメリカからの移住者や透析をしているカナダの原住民の人たちの現状などです。これらの研究をもとに医療システムと現状とのギャップがどこにあるのか、どういう状況が医療システムの利用を妨げているのかなどを明らかにし、より効果的で利用可能なヘルスケアシステムやヘルスケアガイドラインを提言することにつなげていました。

日本では、看護の立場から行なわれた政策提言に向けた研究はまだ十分とは言えない状況があります。また、こうした領域での研究は、集団を対象とした量的研究が中心であり、質的研究ではエビデンスが低いと考えられる傾向にあります。私自身もこの領域での質的研究の意義をあまり認識していなかったところがありました。しかし、バターソン先生の研究から政策提言に向けた質的研究の意義を知ることができ、よりよい医療システムの確立に向けて、量的研究、質的研究それぞれの特徴を活かし、より多角的な視点で研究を積み重ねていくことの重要性を改めて感じました。

短期間ではありましたが、いろいろな刺激を受け、学ばせてもらった貴重な6ヶ月でした。そこでの刺激を胸に秘めつつ、実践の科学である看護として、看護実践の中で生じた疑問や気付きを大切に教育、研究に取り組んでいきたいと考えています。そして、そのためには附属病院との連携が不可欠と考えております。新参者ではございますが、関係各位の皆様今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

大阪大学大学院医学系研究科
保健学専攻 統合保健看護科学分野
看護実践開発科学講座(成人・老人看護学)
教授 清水 安子

就任のご挨拶



この春、大阪府立大学看護学部から基礎看護学講座に赴任してまいりましたが、大阪大学にお世話になるのは今回で3度目となります。1度目は大阪大学医療技術短期大学部看護学科の学生として、今からちょうど30年前の1978年からの3年間、2度目は卒業・進学、就職を経て、大阪大学医療技術短期大学部看護学科助手（基礎看護学、地域看護学）としての1986年からの5年間です。そして、この度は看護管理学を標榜させていただくこととなりました。

看護管理学は、看護サービスの質を良い状態に保つために、看護職者がそれぞれの立場や役割において「ヒト、モノ、カネ、情報、時間」といった資源を、いつ、どこで、どのように、扱えばよいのかを明らかにしていく学問であるといえます。しかしサービスは、必要とされるその場で、提供者の能力に左右されながら形づくられ、形として残らないものなので、その良し悪しの判断も、その場その場で異なるという特徴があります。そこで、サービスの良否の判断基準に通貨という金銭価値を当てはめて考えてみたいというのが、私がこれから取り組もうとしている内容です。確かに金銭感覚は個人個人の経済状態や価値観によって大きく異なるものですが、サービスや品物を購入するかどうかは、ニーズと懐具合に合せて、各自の金銭感覚で評価して決めています。看護というサービスの評価に際しても、日々の金銭感覚がひとつの物差しとなることには変わりありません。そして、個人の感覚をひとつの尺度としてあらわすことができるだけのデータを集めることによって、共通の評価になり得ると考えています。

さて、前任校の大阪府立大学では、その前身の大阪府立看護大学が開学した1994年から13年間在籍し、基礎看護技術を中心に基礎看護学を担当してきました。その間、かなり自由に仕事をさせていただきながら、組織再編や大学の統合・法人化などを体験し、さまざまな局面に関わる中で看護基礎教育の重要性を学ばせていただきました。大学のおかれている状況は、ここ10年の間に大きく変化してきましたが、これからは外部環境に適応するだけでなく、独自性をもって内部の環境を整えていく時期を迎えていると思います。

大阪大学に戻ってくるまでに、3つの大学を卒業・修了し、それぞれに同窓会の案内をいただきますが、会の一員であると自覚しているのは、大阪大学の看護教育機関の同窓会組織である「大阪大学看護同窓会」です。そして、このたび思いがけずも、多くの方々のお力を得て「母校」で仕事をさせていただくことになりました。3度目の正直となるよう、与えられた役割に即して、ひとつひとつの仕事をきちんとこなしていきたいと考えています。

どうぞ皆さま、よろしく願いいたします。

大阪大学大学院医学系研究科
保健学専攻 統合保健看護科学分野
総合ヘルスプロモーション科学講座(基礎看護学)
教授 井上 智子

就任のご挨拶



この度平成19年4月1日付けで、城戸良弘先生の後任として、看護実践開発科学講座の教授に就任致しました。

私は昭和55年大阪大学医学部を卒業、同附属病院で1年間の研修後、第二外科に入局しました。昭和56年より箕面市立病院で3年間の研修、昭和59年より第二外科に帰学し研究を行った後、昭和63年那智勝浦町立温泉病院に外科医長として勤務、昭和64年に再び帰学しました。平成4年7月より半年間大阪拘置所医務部での勤務を経て、平成5年1月大阪大学医学部第二外科（後に消化器外科）助手、平成8年8月より同附属病院手術部に異動し平成17年1月以降は副部長を勤めました。なお、この間昭和62年にケンブリッジ大学、平成2年～3年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校に留学しました。

卒業後一貫して消化器・一般外科の臨床・研究・教育に取り組み、中でも肝胆膵を主な対象領域としてきました。なお、上部消化管や乳腺内分泌の外科にも、各々1年半程の短期間ではありますが、大学の助手として担当した経歴があります。肝胆膵領域の中では、まず、肝細胞癌に対する集学的治療をテーマとし、術前肝動脈塞栓療法やインターフェロン併用化学療法の研究を行いました。また、肝移植もテーマとし、その適応と至適手術時期、胆汁中IL-6による拒絶反応の診断、生体肝ドナーの合併症に関する研究(Lancet 362:687-690, 2003)等を行ってきました。更に、手術部に異動後は、手術医学と医科器械学について、感染対策や機器管理を中心に研究しました。

私が取り組んできた癌治療、臓器移植、手術医学の全ての分野において、チーム医療の重要性を痛感してきました。しかも、最近の医療の高度化と社会の要請に伴い、その重要性は益々増えています。保健学科の有する3つの専攻分野の全てが重要ですが、看護がチーム医療に果たす役割は特に大きく、このような時機にその教育に携わることができるのは大変やりがいのあることと考えております。高度の専門医療知識を持つと共に、病んだ人の心を慮りケアを行える豊かな人間性を持った医療人を育成することを目指し、また、次世代の指導者となる医療人の育成も目標とし、教育に研究に精一杯取り組んでいきたいと存じます。

最後に、大阪大学保健学科看護学専攻と私とのこれまでの関わりにつき、少し触れさせていただきます。平成3～6年私は毎年石橋の学舎にお伺いし、「肝・胆・膵の疾患」の講義を担当させていただきました。また、平成13～19年の間は、厚生労働科学研究のデータ入力と整理を、保健学科の学部/大学院の学生と一緒にして頂きました。何れの経験においても学生のポテンシャルの高さを感じ、今後私の保健学科での教育・研究はとても楽しいものになることと確信しております。

本雑誌の城戸先生の退職のご挨拶に、「阪大の保健学科が他大学に比べて大きく評価できる事のひとつが看護系教員と医系教員の良き協力関係である」とございました。皆様方の今後のご指導、ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科
保健学専攻 統合保健看護科学分野
看護実践開発科学講座(成人・老人看護学)
教授 梅下 浩司